

目 次

まえがき	v
Epigraphs 出典	xiv
第1章 研究史の諸問題	1
1.1. 研究史の「空白」をめぐる	1
1.2. 研究史における累積効果 ～ P 音説を例に～	3
1.3. 忘れられた著作	12
1.4. 古典的著作の読み方 (1)	15
1.5. 個別言語の「特質」とその対照言語学的基盤について	18
1.6. 古典的著作の読み方 (2)	23
1.7. 研究史分野の活性化に向けて ～松下文法の評価と P 音学説をめぐる論点～	27
注	32
【附録】 那珂通世『國語學』(pp. 14-16)に見られる P 音説	37
第2章 『日本文法論』とハイゼの獨逸文典	39
2.1. はじめに	39
2.2. J. C. A. Heyse とハイゼの獨逸文典	41
2.3. 『日本文法論』におけるハイゼからの引用	42
2.4. 原典の特定	46
2.5. 引用文と原文の関係	50
2.6. 残された謎	58
注	63

第3章 『日本文法論』とハイゼの獨逸文典Ⅱ	65
3.1. はじめに	65
3.2. 山田孝雄文庫蔵 <i>Deutsche Grammatik</i>	68
3.3. 『日本文法論』と <i>Deutsche Grammatik</i> の比較に向けて	74
注	80
【資料編】『日本文法論』とハイゼ原文の対応表	82
ハイゼ原文および注釈	84
第4章 <i>Lijgend/Passive</i> の訳述起原	
～「受身」「働掛」および「助動詞」の初出文献をめぐって～	107
4.1. はじめに	107
4.2. <i>Hulpwerkwoord/Auxiliary Verb</i> と「助動詞」の訳述起原	109
4.3. 『 <small>ビ子マ</small> 氏原版 英文典直譯』	117
4.4. <i>Lijgend/Passive</i> の邦訳と「受身」の問題	121
4.5. おわりに	127
注	128
第5章 那珂通世『國語學』の来歴	131
5.1. はじめに	131
5.2. 『國語學』刊行年の問題	132
5.3. 『國語學』の概要	135
5.4. 刊本の成立事情	138
5.5. 雑誌『普通教育』	143
5.6. 『國語學』と『普通教育』	144
5.7. 『普通教育』第五拾壹册および国研本『國語學』	148
5.8. 『國語學』連載記事と刊本の関係	153
5.9. 『國語學』刊行年の範囲	155
5.10. 那珂通世と大槻文彦の関係	158
注	164
【附録】『普通教育』「第一集」目次(第壹册～第拾三册)	167

第6章 大槻文彦と Chamberlain の系譜

～受動使役をめぐる記述の歴史～	173
6.1. 助動詞の相互承接	173
6.2. 全体的順序と局所的順序	177
6.3. 局所的順序と言語間の差異	180
6.4. 受動使役をめぐる記述の歴史	186
6.5. 大槻文彦の系譜	187
6.6. チェンバレンの系譜	192
6.7. 口語と文語	197
6.8. 山田廣之『國語法新論』など	201
6.9. Block (1946) とその後の状況	203
6.10. おわりに	205
注	206

第7章 言語の“Genius”と「國語の本性」

～個別言語の特性をめぐるいくつかの学史的問題～	211
7.1. 研究の背景	211
7.2. サピアにおける Genius の出处	214
7.3. 英語圏およびフランス語圏における“言語の Genius”	216
7.4. 19世紀と20世紀の状況	218
7.5. サピアの Genius: “Drift” との関係	221
7.6. 山田孝雄『國語と國民性』をめぐる	225
7.7. 國語学史と言語学史の問題：チェンバレンの位置づけなど	240
7.8. 思考の鑄型と言語の Genius	258
7.9. おわりに ～話は「言語」に戻る～	266
注	269

初出情報と内容紹介	275
-----------	-----

引用文献	283
------	-----

あとがき	297
------	-----

索引	301
----	-----